

<様式（研究成果情報）>

[成果情報名] シラスウナギの蓄養試験

[要 約] 近年、シラスウナギの不漁により、採捕から養殖業者に販売されるまでの蓄養期間が長期化する傾向にある。そこで、シラスウナギを状態良く蓄養するための水温と塩分条件を検討した。その結果、水温 11～14℃、1/4～1/2 海水で生き残りが良好であり、水温 11℃、1/2 海水で 4 週間蓄養した魚は蓄用しなかった魚と比べて養殖開始後の成長の遅延や生残への影響は認められなかった。

[キーワード] シラスウナギ、蓄養、水温、塩分、生残、成長

[担当] 静岡水技研・深層水科

[連絡先] 電話 054-627-1818、電子メール suigi-sinsousui@pref.shizuoka.lg.jp

[区分] 水産

[分類] 技術・普及

[背景・ねらい]

近年、ニホンウナギは資源の減少から絶滅危惧種に指定され、養殖に使うシラスウナギの量も制限されている。また、シラスウナギの不漁が続くと養殖業者が必要とする量がまともらず、採捕してから養殖池に入れるまでの蓄養期間が長くなる傾向にあり、その間の生き残りや養殖を始めた後の成長等への影響が懸念される。そこで、状態良くシラスウナギを蓄養するための環境条件として適正な水温と塩分を調べた。

[成果の内容・特徴]

- 1 水温 5, 8, 11, 14℃（飼育水淡水）で 8 週間の蓄養試験を実施した結果、5℃と 8℃では他に比べ生残率が低下した。
- 2 淡水, 1/4 海水, 1/3 海水, 1/2 海水, 全海水の飼育水で 8 週間の蓄養試験を実施した結果、全海水で生残率が低くなり、1/4, 1/3, 1/2 海水では 4 週間後までの生残率が 100%であった。
- 3 これらの結果よりシラスウナギの蓄養は水温 11～14℃で 1/4～1/2 海水で実施するのが良いと考えられた。
- 4 水温 11℃、1/2 海水で 4 週間蓄養した魚を用いて養殖試験を行った結果、蓄用をしていない魚と比べて養殖開始後の成長の遅延や生残への影響は認められなかった。

[成果の活用面・留意点]

- 1 シラスウナギの減耗を軽減することで、ニホンウナギ資源をロスなく利用することが可能となり、養鰻業者のコスト削減にも寄与できる。

[具体的データ]

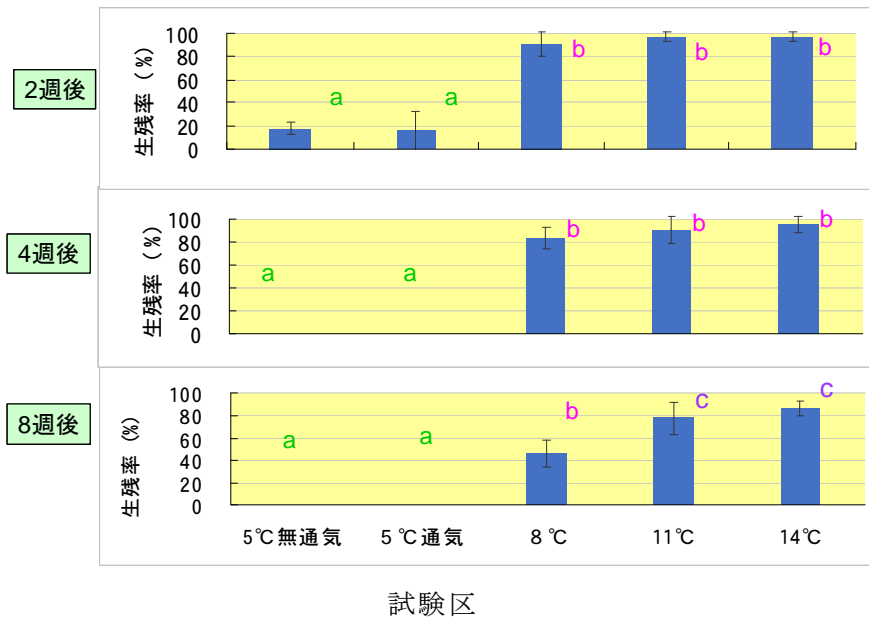


図1 適正水温検討試験の生残率

a, b, c 符号の異なる区間で有意差(危険率 5%)があることを示す。

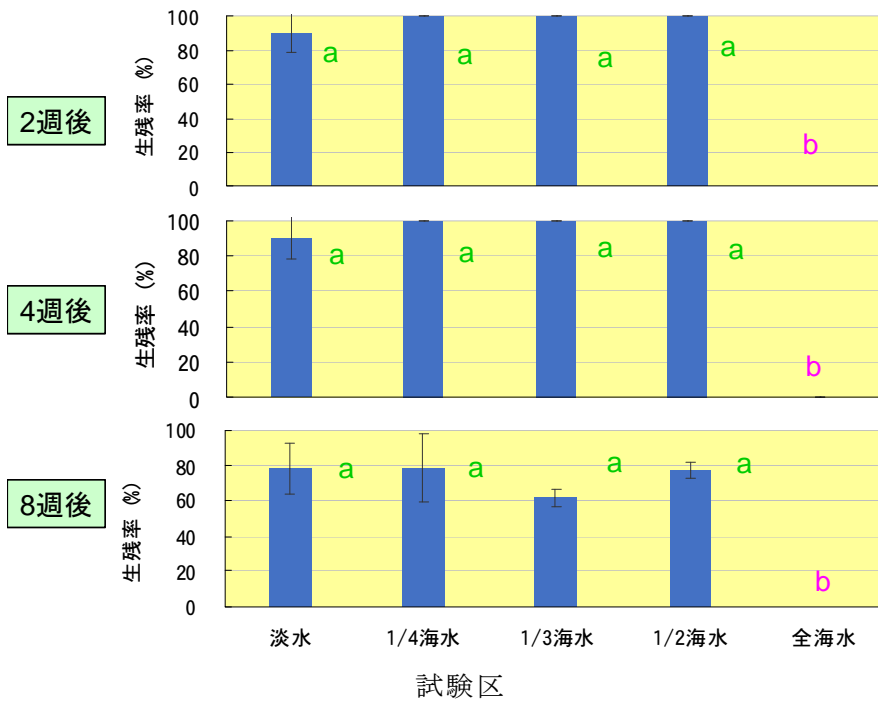


図2 適正塩分検討試験の生残率

a, b 符号の異なる区間で有意差(危険率 5%)があることを示す。

[その他]

研究課題名：シラスウナギ蓄養技術開発と海水飼育による親ウナギ生残特性の解明

予算区分：県単

研究期間：2018～2019年度

研究担当者：今井基文、野田浩之